
オレとキミたちの魔法の時間

凰火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとキミたちの魔法の時間

【Nコード】

N4590X

【作者名】

凰火

【あらすじ】

俺は孤独に生きていた…高校2年の始業式まで
変わり始める俺や周りの人間の心情…
俺はどう変わる？

始まり

朝起きて、昼の学校はただ一人で過し、夜になったら寝る
ただそれを繰り返すだけだった
高校1年までは…

???「んくうく、朝か…」

俺、片桐洋平^{かたぎり ようへい}はいつも通りに起きていた
そして、朝食を食べて支度を整えて学校にむかった

校門まで来ると同学年の人達は始業式の事を話していた
俺が通う学校、国立魔術師育成高等学校は高校2年の始業式に各生徒に精霊召喚を必ずしないといけない

精霊には6つの属性があり、火、風、水、土の4つと光と闇の特殊な2つの属性が存在する

精霊召喚は6つの属性から召喚者の特性に合わせて召喚される
基本的に召喚される精霊は火、風、水、土の4属性の精霊が召喚される

けど極稀に光、もしくは闇の精霊を召喚する人がでるらしい

洋平「はやく俺の番にならないかな」

正直クラスの人達の精霊には興味ないし、自分の精霊もどうせ四大（火、風、水、土）のどれかだろと思いついて待っていた
俺はクラスメイトからよく思われてない

その理由は1年の時に俺は上級魔法、中級魔法を1回も出してないからである

この学校には一定以上の魔力と魔法技術がないと入れなく、生徒の大半は上級魔法を2、3個は使えるのである
すなわち上、中級魔法を一回も使わなかった俺はクラスの問題児として扱われてる

洋平「やつと俺の番か…」

わかっていたが周りから嫌な視線を浴びた
俺はため息をついて魔法陣が書かれた床まで移動して

洋平「精霊よ我と契約を結びて姿を具現化せよ」

すると俺の足下の魔法陣が光だした
光が収まり目の前にいる精霊を確認した

洋平「ん……え！嘘だろ…」

俺の目の前にいる精霊は光っていた
つまり俺は光の精霊を呼び出したのだ

???「何よ、私を見るなり固まって、レディに失礼でしょ」

洋平「ああ、すまん…つい、驚いていたんだ」

???「そう…で、あなたが私のマスターであっているよね？」

洋平「そうだ、俺がお前のマスターの片桐洋平だ」

???「わかった、私は見ての通り光の精霊、名前はサン＝リナ」

リナは全長15?ぐらいで、髪は金髪のロング、あと当然ながら背中に透明な羽が生えていて、体が若干光っていた

洋平「よろしくなりナ」

リナ「こちらこそ、よろしくね洋平様」

この日からだろうか…周りの俺を見る目が変わったのは…

始業式が終わり、2年生で光の精霊を召喚したのは俺だけだった、そして闇の精霊を召喚することは誰もできなかった

俺は教室をいち速く出て、リナを肩に乗せて家に帰った

洋平「リナ…お前を呼び出せたということは俺は光属性の魔法が使えるのか？」

リナ「うーん、どうでしょう？洋平様からは微かに光の魔力を感じますが…」

洋平「そう…ならいいや、使えるなら憶えようと思ってただけだから」

リナ「いつか使えるよ、きっと」

洋平「だといいな…」

俺はこの日からちよつとずつ自分が変わり始めたのに気づいたのは大分先のことである

始まり（後書き）

2 作目来ました

1 作目終わってないのに2 作目作るのは無謀なことなのだろうか？
と書いていました

けど、何事にも挑戦ということを書いてみました

と言うことで今回はこの辺でノシ

模擬戦闘（前書き）

まだヒロイン達は出ません、スイマセン次の話で出すつもりです

模擬戦闘

夢…いや、これは過去の記憶か…

とても嫌な記憶、俺が本気で魔法を使わなくなったきっかけ…

洋平「俺はあの時、俺が使える最も強い上級魔法を使い、生徒5人を病院送りにした…」

そう…俺はこの日から下級魔法しか使わなくなった

洋平「ん…朝か…」

リナ「おはようです洋平様」

洋平「おはよう、リナ」

俺は光の精霊であるリナを見て

洋平「昨日は気にならなかったが服はある程度あるのか？」

リナ「2、3着ほどありますよ」

洋平「そう…欲しくなったと言えば、安物なら買えるから」

リナ「ありがとうございます、洋平様」

洋平「とりあえず、学校に行く準備だ、リナの制服は昨日渡したよ

な？」

リナ「はい、それでは着替えて来ます」

そう言つてリナは俺のベットの近くに置いてある少し大きめの箱に入つて行つたその箱がリナの寢床や着替える所になっている俺は制服に着替え、リナが出てくるのを待つた
少しするとリナが学校の制服を着て出て来た

リナ「洋平様：変じゃないですよね？」

洋平「大丈夫、ちゃんと着こなせてる」

リナ「ありがとうございます」

そしてリナは俺の肩の上に乗つた
どうやら俺の肩に乗るのが気に入つたらしく、移動する時は自分で飛ばす俺の肩に乗る
俺は朝食を食べて学校にむかつた

校門に人だかりが出来ていた
理由は簡単、今日クラスを決める模擬戦闘があるからである
そして対戦の組み合わせが校門に貼り出されるからである

洋平「一応見とくか」

リナ「人が沢山いますけどどうやって見るんです？」

洋平「リナが飛んで見てくる」

リナ「わかりました、洋平様とその相手の名前を見つけて来ます」

洋平「見るのは俺の名前と何回戦に出るのかだけでいい」

リナ「わかりました」

リナは飛んで行き、すぐ戻って来た

洋平「意外と早いな」

リナ「いえ、洋平様の名前が上から三番目にあつたからです」

洋平「となると第三試合目か…いつも通り手を抜いて負けるとするか」

リナ「え？勝たないんですか？」

洋平「下手にこれ以上注目を集めたくない」

俺はグラウンドの横にある闘技場にむかった

闘技場には試合場と観客席の間に特殊な結界が張られており、試合をする者は遠慮なく魔法が使える

「お前が俺様の対戦相手か？だとすると俺様はついてるなこんな雑魚が相手だとは、ガハハハハ」

誰だこいつ…ああ俺の対戦相手かと思いつながら内心非情に腹がたつていた

「だいたい何でお前のようなクズがこの学校にいるのかが解らんな

「下級魔法しか使えない雑魚が」

プチン、俺の中で何かが切れる音がした
男が笑いながら去って行くと

洋平「気が変わった、あいつ瞬殺する」

リナ「ええ、私も頭に来ました」

洋平「リナは試合中は俺から絶対離れるなよ」

リナ「何ですか？」

洋平「試合になれば解る、とにかく離れるなよ」

リナ「わかりました」

俺の順番はすぐに来た

俺は試合場に出て、試合開始の合図を待った

目の前には何か言っている対戦相手がいるが気にしない

そして対戦開始の合図がなった

相手が拳に炎を纏わせて接近してきたが俺の所まで来ることはなかった

なぜなら相手の両手両足は氷漬けになっているからである

「な!？」

相手が驚くのは魔法の属性に氷はないからである

氷は水と風をうまく組み合わせるとできるが、これは上級者がすることである

さらに俺はそれを無演唱でした
俺はすかさず演唱を開始した

洋平「万物の根源たる四つのエレメント、我に仇なす敵を滅せよ…」

「なんだこれ!？」

相手の四方向に球型の四大の魔方陣が出て来た

洋平「エレメントボム」

俺はすぐに自分の目の前に結界を張り、そして相手の周りに飛んでいた魔方陣が光だして重なり凄まじい位に爆発した

結界を解いて試合場を見渡すと爆心地を中心に地面がえぐれていた
観客席は静かになっていたのでそして教師の人達が慌てて対戦相手を回収した、おそらく病院に移送されるだろう

そして試合終了の合図がなった

結果的戦闘はすぐに終わった

俺はすぐに試合場から出た

模擬戦闘2

俺は控え室にいた

理由は当然ながら試合に勝ったからである

試合の後一応相手の事を聞いたが、全治6ヶ月らしい

洋平「さすがにやり過ぎたよな」

リナ「大丈夫だよ洋平様、挑発してきた相手が悪いんだよ」

洋平「けどな、加減出来なかった俺も悪いんだ」

リナ「洋平様は優しいですね」

洋平「そうでもないさ」

俺は控え室にある対戦表を見た

そして次の試合をどうするか考えた

勝つかあえて負けるか…

???「……………ねえ」

勝つのは可能だが…

???「…この…の精霊を…れて…人」

負けると手を抜いたことがバレルだろう…

???「いい加減、気付いてよ!」

大声と共にいきなり殴られた
殴られた箇所を抑えながら後ろを振り返るとそこには水の精霊を連れた女子がいた

見た目は小柄、金髪ポニーテイル、背中に杖を背負ってる
精霊の方は大きさはリナと同じくらいで、髪は青、背中の羽根は薄い青だった

???「やつと気付いてくれた」

洋平「殴られたら誰でも同じ反応すると思うぞ…」

???「それよりも、片桐洋平君だよね？」

洋平「そうだけど…」

???「やつぱり！私は姫路深雪^{ひめじ みゆき}、片桐君に聞きたいことがあるんだけど…いい？」

洋平「何？、術の事なら教えないから」

姫路「ええ！なんで？」

洋平「俺は他人に術を教えないことにしてるから」

姫路「じゃあ…次の試合、私に負けたら教えてもらおうから」

洋平「はあ、わかった俺に勝てたらな」

姫路「約束だよ」

姫路さんは元気よく部屋を出て行った

洋平「俺も行くか」

リナ「洋平様…いいんですか？」

洋平「勝つから問題ない」

そして俺は試合場に行った

試合場に着くと姫路さんがいた

洋平「ねえ姫路さん…」

姫路「呼び捨てでいいよ」

洋平「じゃあ俺も呼び捨てでいいから」

姫路「で何かな？」

洋平「対魔法用の防具を身に付けた方がいいと思うよ」

姫路「……馬鹿にしてるの？」

洋平「そう…加減出来ないかもしれないけど…恨まないでよ」

姫路「恨まないよ、勝つのは私だから」

そして試合開始の合図が鳴った
姫路は杖を構えて詠唱していた

姫路「水よ、風と混ざりて刃となれ、アクワカッター」

姫路の前に少し大きめの水の塊が出てきて、そこから無数の水の刃が飛んで来た

洋平「無駄だよ」

俺は地面を蹴り

洋平「グランドウォール」

岩の壁を出して防いだ

しかしすぐに岩にひびが入った

俺はすぐに足下に水の魔方陣を展開し無詠唱で術を唱えたが術が発動するまで時間がかかるため、俺は岩の陰から出て

洋平「散れ、エアバーン」

姫路の前にあった水の塊が弾けた

そして俺は風を使って弾けた水を空中に浮かせて姫路の周囲に移動させた

洋平「水よ、氷の刃となり敵を討て、アイスエッジ」

姫路の周囲に浮いていた水が先が尖った状態で氷り、姫路にむかって飛んで行った

しかし姫路は杖で最小限防いで避けた

姫路「まさか私が出した水を使うなんて…」

洋平「…煉獄の炎よ、我に仇なす敵を焼き尽くせ、ボルケーノ」

詠唱が終わると同時に地面を蹴ると姫路の周りの地面に無数の魔方阵が出現して火柱を出した

姫路「水よ、我を守りたまえ、ウォーターフィールド」

詠唱が終わると姫路を囲んでいた火柱が消えた
火は水に弱いたため簡単に打ち消される

洋平「姫路…悪いけど、俺の勝ちだ」

姫路「どうして断言できるの？私はまだ余力はあるけど…」

洋平「すぐに解るさ」

言い終わると俺が出した岩の後ろから青い光が出て

洋平「精霊召喚…スイ」

岩の後ろから人と同じくらいの大きさの水の精霊が出てきた

スイ「洋平…いい加減にちゃんと詠唱して呼び出してくれない」

スイは見た目は髪が青いロング、羽根はない

洋平「詠唱が終わってすぐに来てくれるなら詠唱するけど」

スイ「こつちにも準備がいるの！だから少し時間がかかるの！」

洋平「他の奴らはすぐに来るけど」

スイ「…本当？」

洋平「確かめるか？……契約に従い我が前に姿を表せ、フィル、ウル、クロア」

俺の前に火、風、土の魔方陣が出現して、そこから人と同じくらい
の大きさの精霊が3人出てきた

フィル「どうしたの？」

ウル「洋平様ただいま参りました」

クロア「また親父さんとケンカ？」

フィルは火の精霊で髪は赤いショート、羽根はない

ウルは風の精霊で髪は緑で短めのツインテイル、羽根はない

クロアは土の精霊で髪は茶色で長いポニーテイル、羽根はない

洋平「スイ…何か言うことは？」

スイ「次はすぐに来ます…」

洋平「なら許す、みんなあの子を気絶させてくれない？」

フィル「任せて」

ウル「洋平様の命令なら」

スイ「意外と軽い命令ね」

クロア「すぐに終わるね」

姫路「え！？きゃー」

姫路は召喚した精霊たちに成すすべなく気絶させられた

姫路「……ん、ここは？」

洋平「気がついたか？」

姫路「え！？きゃっ」

洋平「そんなに驚くか？あそこは控え室だ」

姫路「……」

洋平「じゃ、俺は次の試合があるから……」

姫路「え……あ、」

俺は部屋を出た、姫路が呼び止めようとしていたのには気がつかなかった

試合場に出た俺はリナに話しかけた

洋平「この試合でラストなんだか…」

リナ「ここまで勝ったんだから勝ってください洋平様」

洋平「なら最初から本気でやるか」

試合の合図となり、1分後には終了の合図がなった

クラスメイト

俺は憂鬱な気分で学校に登校している
理由は昨日のクラス分けの模擬戦で全勝、おまけに高度な上級魔法
や召喚術をしたからだ

洋平「はあ」

リナ「洋平様、さつきからため息ついてどうしたのですか？」

洋平「昨日は派手にやり過ぎたな」と反省してるんだ」

実際に去年は下級魔法しか使わなかったヤツがいきなり高度な上級
魔法や召喚術を使ったらそれは目立つし色々と質問されるだ
ろう

洋平「俺は余り目立ちたくないのに…」

「か…片桐！」

後ろから呼ばれたが無視して先に行こうとした

「無視しないでよ！」

大声とともに後ろから殴られた

仕方ないので後ろを振り返るとそこには姫路がいた

洋平「…姫路は人に話しかけるときは殴るのか？」

姫路「片桐が無視するたらでしょ！」

洋平「で何？魔法なら教えないよ」

姫路「やっぱりダメ？」

洋平「約束しただろ、俺が勝ったら教えないって」

姫路「まさか片桐が召喚術を使えるとは思わないよ」

洋平「とにかく勝ちば勝ちだ」

俺は再び歩き始めた

姫路「あ、ちよつと待ってよー」

慌てて姫路がついてきた

姫路「じゃあせめてもう一度、精霊を見せて」

洋平「リナ、服の中に隠れないで出てこい」

リナ「洋平様、姫路さんが言っているのは違う精霊だと思いますよ」

洋平「姫路、これが始業式に召喚した、俺の精霊」

姫路「わっ！光の精霊だ、私は水の精霊なのに」

???「私じゃ不満？」

姫路の胸のポケットから水の精霊が出て来た

姫路「ミイが不満なわけじゃないじゃん、ただ光の精霊が珍しいの」

ミイ「そう…良かった」

姫路「そう言えばまだこの子を紹介してなかったね、この子は私が召喚した水の精霊の…」

ミイ「ミイです」

洋平「なら俺も一応全員紹介するか…姫路、ちょっとついてきてくれ」

俺は人目が少ない所に来て詠唱した

洋平「契約に従い我が前に姿を表せ、フィル、スイ、ウル、クロア」

4つの魔方阵が形成されそこから大きさが人と同じくらいの精霊が4人出て来た

洋平「さてと…まず、光の精霊の…」

リナ「リナです」

洋平「そして、俺が召喚可能な精霊の…」

フィル「火の精霊、フィルです」

スイ「水の精霊、スイよ」

ウル「風の精霊、ウルです」

クロア「土の精霊、クロアだ」

姫路「……」

ミイ「……」

姫路とミイが啞然としていた

洋平「紹介も終わったし、ウル以外戻っていいよ」

するとウルだけ残って、他は何か呟きながら戻って行った
もちろんリナは俺の肩に座っている

姫路「そう言えば精霊を4人召喚してるのに疲れないの？」

洋平「別に疲れないけど」

姫路「片桐の魔力って底なし？」

洋平「…そんな事より、ウル、学校の近くまで頼めるか？」

ウル「わかりました洋平様」

洋平「姫路はどうする？」

姫路「私もいいの？」

洋平「今回だけだから…」

ウル「それじゃ…いきます！」

ウルが作り出した風で学校の近くまで飛ばされた

洋平「大丈夫か姫路？」

姫路「し…死ぬかと思ったよ」

洋平「なら大丈夫だな」

俺は学校にむかった

姫路は少し慌ててついて来た

そして学校の校門まで来ると掲示板にクラス分けが貼られていた

洋平「リナ、見てきてくれ」

リナ「わかりました」

リナは勢いよく飛び出した、少しするとリナが帰って来た

リナ「洋平様の名前はAクラスにありました」

洋平「やっぱりか…」

この学校は二年生から実力でクラスが分けられる

クラスはA～Eまであって、それぞれのクラスで授業の内容や授業時間が違う

例えばAクラスだと余り実戦を交えた授業はしないのにたいして、

Eクラスだと実戦を交えた授業ばかりする
あとEクラスの先生は鬼の様に厳しいらしい

俺は自分のクラスであるAクラスにむかった

そして今日に入るなり全員、何やら話し始めた

俺は自分の席を探して、座った

席は窓側だった

「アイツがあの…」 「何で急に…」 「私は召喚術が気に…」 「アイツとなか…」

クラスの奴らが話しているのは昨日、俺がしたことだろうとすぐにわかった

少しすると先生が入って来て

「私がこのクラスを受け持つことになった、みんな一年間よろしくな、さっそくだが、みんなには自己紹介と自分の精霊の属性を言うてもらおう、ではまずは…」

次々と自己紹介が行われていった

姫路「姫路深雪です、水の属性が得意で、精霊の属性は水です」

あ、姫路は同じクラスだったのか…

そして俺の番が回ってきた

洋平「片桐洋平です、魔法は火水風土なら下級から上級まで扱えます、精霊の属性は光です」

俺の発言に最初姫路が反応して、それからクラス中が騒ぎだした

「みんな静かにしろ！」

先生の一喝で静かになった何気に迫力があつた
そして自己紹介が終わり

「授業は明日から始まるから、忘れ物をしないようにな、今日はこれで終わりだ」

え！もう終わり！そんな事を思ってしまうほど短かった
俺は帰ろうと席を立つと…

姫路「片桐、さっき言った事本当？」

姫路が話しかけて来た

洋平「姫路は見ただろ、精霊を召喚するならそれなりにその属性を扱えないと召喚できないんだよ」

姫路「なるほど」

俺は再び帰ろうとしたが…何故かクラス的女子が俺の周りを囲んでいた

洋平「な、何で俺は女子に囲まれてるのかな？」

姫路「あ、本当だ」

「片桐君、魔法の上達の仕方を教えて」「自己紹介で言っていた事本当？」

「精霊見せて」

「何で姫路さんと仲良いの？」

俺はこの状況から脱出するために窓を開けて、そこから飛び降りた

洋平「風よ吹け、フライ」

俺は風を使つて地面に着地した

すると同じ方法で女子が数人降りて来た

俺は地面を蹴り、無詠唱でグランドウォールを横に長くして出した
そして俺は学校の敷地内の森に逃げた

洋平「まだ追いかけて来るし…」

俺はさらに森の奥まで逃げた

すると突然なにかに掴まれて穴の中に落ちた

洋平「イッテ」

「???」「しつ、静かに」

「片桐君どこ」「片桐君、出てきて」「ねえ、かなり奥まで来たけど…」

「うん…危ないし今日は諦めよ」

そして女子たちの足音が遠ざかっていった

洋平「助かった、ありがとう」

「???」「気にしないで」

そして穴から出て、森の入り口まで戻って来た

洋平「本当に今日はありがとう、えーと」

???「私は宮沢^{みやさわ}花音^{かのん}」

彼女は小柄で髪はショートだが頭にアホ毛があった

洋平「俺は片桐洋平」

宮沢「片桐…洋平…、あゝキミが噂の人か」

洋平「噂って…」

宮沢「めちゃくちゃ強くて召喚術も扱える人で女に優しい」

洋平「俺は別に女に優しくした覚えはないけど…ん？宮沢さんって…」

宮沢「花音」

洋平「宮沢」

宮沢「花音！」

洋平「…花音って確かAクラスでそして欠席してただろ」

花音「そうだよ、何で知ってるの？」

洋平「俺もAクラスだから」

花音「ふ〜ん、じゃあ私そろそろ帰るね」

洋平「俺もそろそろ帰らないとな…」

花音「じゃあね〜また明日、洋平」

花音は走り去った

洋平「元気な人だな…」

俺は呟いて家にむかった

授業

夢…

俺は余り夢は見ない

理由は夢の代わりに過去の記憶が再生されるからだ

洋平「まだ俺は許されないのだろうか…」

俺は過去に5人、魔法を使えなくなるぐらいの大怪我を負わせた
いくら正当防衛でも罪悪感はある

俺はまだそれを許されてないのだろうか…

洋平「……朝か」

俺はベットから降りて机の引き出しを開けた
中には青い結晶がついたペンダントがある

リナ「何ですか？このペンダント」

洋平「小学生の時に着けてた拘束器具のような物」

リナ「このペンダントがですか？」

洋平「これを着けると極端に魔力が抑え込まれる」

俺は引き出しを閉めて、制服に着替えた
何かを察したのかリナは何も言わなかった

朝食を食べて、学校に行った
教室に入ると女子が数人話しかけて来たが軽くあしらって自分の席に座った

花音「洋平おはよー!」

洋平「ああ、おはよー花音」

花音が話しかけて来た
するとクラス中が騒ぎだした

姫路「片桐…」

洋平「どうした姫路？」

姫路「わ…わたしも名前で呼んでください!」

さらにクラス中が騒ぎだした

洋平「…何で？」

姫路「名前で呼んで欲しいからです!」

洋平「他に理由は？」

姫路「…その子は名前で呼んでいるからです…」

洋平「…気がむいたらな」

姫路「よ…洋平君意地悪です…」

洋平「…わかった、み…深雪、これでいいだろ」

深雪「は…はい！」

何故か深雪は顔が真っ赤になった

そして嫌な視線を感じた

周りを見渡すと男子からは殺気、女子からは嫉妬の念を感じた

「授業始めるぞー」

先生が入って来た

するとさっきまで感じた殺気とかが無くなった

なんとも切り替えが早い奴らだ

そして深雪と花音は自分の席に戻って行った

「さっそくだが授業は闘技場で行う」

「えー」「まじかよ!?!」「さっそく実践かよ」「めんどー」

クラスの奴らと共に渋々闘技場にむかった

闘技場の中にある試合場まで行くと

「ではまず上級魔法を二十個使える奴、手を挙げる！」

俺は手を挙げた

周りを見ると俺の他に手を挙げたのは2人だった

花音と…誰だ? 解らん

「よし、ならお前とお前、前に出ろ」

あ、指された

仕方無いので前に出た

「お前ら、さっそくだが戦え」

洋平「え？」

「もう一度言う、お前ら本気で戦え、手ー抜くんじゃねーぞ」

鬼がいる！そこに鬼がいる！

仕方無い、相手の方を見ると……相手は女子でした……花音じゃなくて別の女子でした

洋平「…恨むなら先生を恨んでよ、知らない人」

「……し、知らない人！？貴方、私の名前を覚えてない？」

洋平「覚えてない、むしろ誰？」

「……キー、私の名前は羽佐間小百合^{はやま さゆり}、小百合様と呼びなさい」

洋平「…わかった、すぐに忘れるから」

羽佐間「ムキー、とことん私を馬鹿にして…覚悟しなさい！」

洋平「覚悟するのは羽佐間さんの方だ」

羽佐間「小百合様と呼びなさい！」

洋平「じゃあ提案だけどさ、羽佐間さんが俺に勝ったら小百合様って呼んでなおかつ下僕になってやる」

羽佐間「あら、いいのかしら？」

洋平「ただし、俺が1つの魔法だけで勝ったら、逆に俺に従え」

羽佐間「…理由を聞かせてください」

洋平「放課後、クラスの女子が血相変えて追いかけてくるから」

羽佐間「それを私に止めると…いいですわ！その提案受けますわ！」

洋平「なら契約成立つと、先生みんなを避難させた方がいいですよ」

「よしわかった、おい！お前ら観客席に移動しろ！」

するとみんな一斉に観客席に移った

花音と深雪は心配そうな顔をしていたが…

洋平「じゃあ、始めようか」

羽佐間「いきますわよ、ファイア！」

俺は飛んでくる火の玉をかわして

洋平「免罪の印…」

足下に魔方阵が展開した
そしてすぐに俺は走った

羽佐間「何をする気が知りませんがさせないわよ、獄焔の炎よ、燃え上がれ、イグニート」

地面から無数の炎が出て来た
しかし、炎が出る前に小さい魔方陣が展開していたので避けやすかった

洋平「冤罪の印…」

再び足下に魔方陣が展開して
そしてすぐに走った

羽佐間「風よ、敵を刻め、エアスラッシャー」

羽佐間の前に魔方陣が展開してそこから風の刃が幾重にも出て来た
俺は立ち止まり

洋平「重罪の印…」

足下に魔方陣が展開した
すぐに横に跳んだが何カ所か掠めた

羽佐間「このまま切り刻んでさしあげますわ」

羽佐間が魔力をさらに注いだのか魔方陣から出て来る風の刃の数が
増えた

俺はすぐに走った

洋平「有罪の印…これで終わりだ」

足下に魔方阵が展開して、それぞれの魔方阵が線で繋がった

羽佐間「なんですの！これは！？」

そう俺は羽佐間を囲む様に4つの魔方阵を展開していた

洋平「汝に裁きと天罰を、ジャッジメント！」

4つの魔方阵の内側の空中と地面に無数の魔方阵が展開して、空中にある魔方阵からはレーザーが出て地面にある魔方阵に当り乱反射した

そして魔方阵を繋いでる線の上で反射したレーザーはさらに反射したさらに空中でも反射していた

魔法が消えるのとぐったりと倒れている羽佐間がいた

洋平「加減はしといたが…大丈夫か？」

羽佐間「し、死ぬかと思いましたわ…」

洋平「リナ頼めるか？」

リナ「お任せください洋平様」

リナが羽佐間に近づき治癒魔法をかけた

羽佐間「…あ、ありがとう…ですわ」

リナ「終わりましたよ」

リナは羽佐間から離れ、俺の肩に乗った

洋平「ご苦労様」

リナ「いえいえ」

洋平「さて、羽佐間さん、約束守ってよ」

羽佐間「…わかりましたわ」

羽佐間は立ち上がり俺の前に来て片膝ついて

羽佐間「私は洋平様に従いますわ」

洋平「様は付けなくていいし、普通に接してくれない？」

羽佐間「え！？いいんですの？」

洋平「俺はただ…」

深雪「洋平君、さっきの術教えて」

深雪が横から飛び付いてきた

俺はそのまま地面に押し倒された

洋平「教えないし、深雪には無理だ」

俺は力任せに深雪を引き剥がした

深雪「ちえ、ケチ」

洋平「とにかく、これからよろしくな小百合」

小百合「さ、小百合！」

小百合は顔を真っ赤にして

小百合「こ、こちらこそ、よ、よろしくで、ですわ」

洋平「どうした小百合？顔が真っ赤たぞ」

小百合「な、何でもないですわ」

小百合は顔を背けた

洋平「ん？変な奴…」

そして先生とクラスの人達が試合場に戻って来た
授業はまだ続くみたいだ

授業（後書き）

詠唱のセリフが全然いいのが思い付きません

それから羽佐間小百合のセリフで『私』は『わたくし』と読んでください

更新スピードは変速気味ですが理由はリアルが忙しいからです
主に試験対策で…

そんな訳でこれからもよろしく願いしますノシ

授業2

どうゆうわけか俺は女子生徒5人に魔法を教えている…

少し離れた場所で先生と小百合が残りの生徒にスパルタ教育をしている

どうしてこうなったと言うと、小百合との勝負が終わった後に先生が

先生「片桐、羽佐間、お前らに俺が教えても意味が無さそうだから
…片桐は一人で、羽佐間は俺と一緒にコイツらに教える」

洋平「先生…俺、他人に魔法を教えるのは…」

先生「片桐は最低でも5人、教えて上達させる」

洋平「…出来なかったら？」

先生「お前の評価を下げる」

洋平「…わかりました、5人だけ教えます」

先生「よろしい、3日後に試験するからそれに全員合格させる」

洋平「わかりました、メンバーは俺が選んでいいですね？」

先生「好きにしろ」

俺はすぐにメンバー5人の内2人は決めた
深雪と花音だ

そして残り3人、どうしようか考えていた

「片桐君私を選んでー」「片桐君私よ私!」「片桐!俺に教えてくれー」

五月蠅いなゝもういいや、奥で騒いで無いあの3人に決めよう
俺は人混みの中を通り奥の3人を連れ出した

洋平「先生、この5人に決めました」

先生「よしわかった、お前らは向こう側に行け」

俺たちは先生たちから離れた
そして俺は5人を見た

俺はこの時、選んだ5人が全員女子だと気づいた

洋平「…最初に言っておく、俺はその2人以外名前すら覚えてない、だから簡単に自己紹介してくれないか？」

すると深雪と花音以外のメンバーがそれぞれ

???「私は黒谷彩夏くろたに さやかです」

背は俺より少し低く、髪は黒く、ロングのストレート

???「私は相澤優希あいざわ ゆつき」

背は俺とほぼ一緒に、髪は少し茶色で、ロングのツインテール

???「私は三枝葵さえぐさ あおいと申します」

背は低くて、髪は黒く、一纏めにされている

洋平「わかった、ありがとう、さっそくだが魔法をいくつか習得するか、単純に技術を向上させるか、どっちがいい？」

深雪「私は新しく魔法を習得したい！」

花音「私は技術かな」

黒谷「私は技術を向上させたいです」

相澤「…私も技術を向上させたい」

三枝「私は新しく魔法を覚えたいです」

5人はそれぞれの意見を言った

洋平「それじゃあ、深雪と三枝さんはちょっとこっちに来て、あとの3人は体を慣らしとして」

俺は深雪と三枝さんを少し離れた所に連れて行き

洋平「まず、自分の得意属性を教えて」

深雪「私は水だよ」

三枝「私は風です」

洋平「それでどうゆうのが覚えたい？」

深雪「凄く強いやつ」

三枝「私は風の上級を教えて欲しいです」

洋平「2人には上級の覚え方を教える、と言って簡単だそんなに難しく無い」

深雪「本当!」

三枝「どうゆうふうにするんですか?」

洋平「中級の魔方陣に一工夫加えて注ぐ魔力の量を増やせばいい、詠唱はやってれば自然と教えてる」

深雪「それだけ?」

洋平「自分の魔力の残量には気をつけろよ、一応手本を見せる」

俺は中級に使う魔方陣を展開した

洋平「そしてこれをこう変える」

展開していた魔方陣が少し変わった

洋平「魔力を注ぎ、成功したら自然と詠唱が頭の中に流れる、…濁流よすべてを飲み込め、ビックウェーブ」

すると大波が地面から出てきた

洋平「こんなところだ、さっきは水だが、風も同じようにできる」

深雪「わかった」

三枝「わかりました」

洋平「それじゃあ、俺は他の3人を教えに行く、魔力をかなり消費するから気をつけるよ」

俺は花音たちの所に行った

洋平「体は慣らしたか？」

花音「ばっちり」

黒谷「大丈夫です」

相澤「…問題ない」

洋平「じゃあ、今から俺が離れた場所から攻撃するから、3人はそれを避けながら俺に攻撃しろ」

3人は頷き、そして互いに距離をとった、俺は急いで3人から離れた

洋平「それじゃあ始めるぞ、…ファイヤ」

俺は3つ魔方陣を展開して個別に狙った
3人ともそれを軽く避けた

洋平「轟け、グレイブ、…散れ、エアバーン」

俺は地面を蹴った、するとそこから四方向に岩の柱が壁まで隙間無く出てきて、3人を分断し、エアバーンがランダムにそれぞれ襲った

洋平「…スプラッシュ」

花音の目の前に水の塊が出てきてはじけた
花音は避けきれず当り地面に倒れた

洋平「…グレイブ」

次は黒谷の足下の近くから岩の柱が出てきて黒谷に当たった

洋平「…エアボム、エアスラッシャー」

最後に相澤の左右に風で作った爆弾を出現させて、それを攻撃した
すると爆弾は爆発し、かなり強い風が吹いて、相澤は壁まで飛ばされ壁に激突した

洋平「大丈夫か？」

俺は3人に聞いてみたが返事がない
俺は3人を近くに運んで

洋平「リナ頼んだぞ」

リナ「了解しました」

リナは3人に回復系の魔法をかけ始めた
俺は深雪たちの方を見た
魔方陣が崩れたりしてかなり手こずっていた

リナ「治療、終わりました」

洋平「ありがとうリナ」

俺は3人の顔の上に水を出して顔にかけた

花音「ひゃ！」

黒谷「にゃ！？」

相澤「！？」

3人は勢い良く起き上がった

洋平「3人とも起きたか？」

3人は頷いた

花音「洋平…意外とスパルタ」

洋平「一応、3人がどれだけ動けるか確かめたただけだ」

黒谷「それでどうでしたか？」

洋平「3人に足りないのは詠唱のスピードと判断力と注意力、3人とも最後の攻撃に反応しきれてなかった」

花音「どうして詠唱スピードが足りないってわかるの？」

洋平「3人とも魔法で防御しなかったから、おそらく詠唱が間に合わないから防御が出来なかったと思ったから」

黒谷「詠唱ってどうやったら速くなるんですか？」

洋平「短縮すればいい」

相澤「…どうやって」

洋平「そもそも魔法を発動条件は魔力と魔力を練る集中力、詠唱は魔力を練る手助けの様なもの、つまり…」

相澤「…魔力を手助け無しで練ることができれば詠唱が速くなる」

洋平「そうゆうこと、でもこれは難しいことだ」

花音「無詠唱してる人が言うത്現実味が無いけど」

洋平「実際にやればわかる」

花音「…散れ、エアバーン」

花音が俺の詠唱を真似したが魔法は発動しなかった

花音「え、あれ？」

洋平「魔力が練れて無かったら魔法は発動しない、あと人は属性によって魔力を練るのが得意、不得意がある、花音は風は得意なのか？」

花音「私は土が得意だよ」

洋平「土か…術名と地面を蹴るが俺の短縮方法なんだが…やってみて」

花音「…ストンウォール」

そして花音が地面を蹴ると10?ぐらい地面が上がった

洋平「こつは蹴った瞬間に練った魔力を地面に流し込む」

黒谷「あ、あのく、私は風が得意なんです、どうしたらできますか？」

洋平「…詠唱は一言、そして術名を言うのが俺のやり方」

黒谷「わかりました」

相澤「…私は火が得意」

洋平「火か…火は魔力を練る時に炎のイメージをするといいぞ」

相澤「…わかった」

3人がそれぞれ練習を始めた

俺は深雪たちの方を見た

2人ともダウンしていた

俺は2人のところに行った

洋平「大丈夫か？」

深雪「魔力を使いすぎて…いま…休憩中…」

三枝「私も…魔力を使いすぎました…」

洋平「2人ともこれを見て」

俺は風、水の上級魔法の魔方陣を見せた

洋平「これを手本に次からやってみて」

そして俺は花音たちのところに行った

途中で先生たちの方を見たが先生以外全員ダウンしていた…何があった？

俺はあまり考えないことにして、花音たちの練習を手伝った

授業3

洋平「…みんな飲み込み早いな」

花音たちは自分の得意属性の魔法をかなり短縮できるようになっていた

花音「洋平、中級は少し出来たけど上級が短縮出来ない」

洋平「上級は魔力を練るのが難しいから短縮は無理だ」

花音「わかった」

洋平「下級なら慣れれば無詠唱が出来るから頑張れよ」

花音「本当!」

洋平「ああ、他の2人にも伝えといてくれ」

花音「わかった」

花音は2人の所に行った

洋平「…もうすぐ授業が終わるな」

俺は時計を見ていた

すると深雪たちの方から強い風が吹いてきた
俺は気になり深雪たちを見に行った

2人はそれぞれ魔方阵を張って集中していた

深雪「水よ、濁流となり全てを飲み込め、ビックウェーブ」

見事にデカイ波が深雪の前に出現し、前に流れて行った

三枝「風よ、我に仇なす敵を切り刻め、カマイタチ」

三枝の詠唱が終わっても何も起きなかった
と思ったら壁に無数の切り跡が出来た

おそらく目視することができない魔法なのだろう

洋平「深雪、三枝さん、どれくらい覚えた？」

深雪「私は今ので2つだよ」

三枝「私も2つです」

洋平「ならもうすぐ授業が終わりそうだから休んで」

深雪「わかった」

三枝「わかりました」

すると2人はその場に座り込んだ

俺は花音たちの方を見た

どうやら花音たちも休憩しているようだった

先生たちの方を見ると戦闘訓練をしていた

前にテレビで軍の演習を見たことがあるがそれに似ていた気がする
この世界の街や村の外にはモンスターがいて、軍は主に街を守る組織だと俺は教わった

実際に何度か親に街の外に連れて行かれモンスターと戦わされたことがある

洋平「…あの頃は辛かったな」

俺の両親は名前を出したら街の人が全員知っているような程、この街の中では強い人たちだ

街に片桐という名字が多くて本当に助かってます

俺は父親から魔法はほとんど教えてもらってない

母親に幾つか教えてもらって、父親がそれを試す…実戦で

深雪「洋平君どうかしたの？ぼーとしてるよ」

洋平「先生の教え方を見て昔のことを思い出してた」

三枝「片桐君は魔力がかなり高いですけど、片桐君ってまさかあの2人の…」

洋平「…だったら俺は今頃街の有名人だし、それに…」

深雪「洋平君が誰の息子だろうと私は…会ってみたいです」

深雪の顔が紅くなっていた

洋平「深雪、顔が紅いが熱でもあるのか？」

深雪「え？」

俺は深雪の熱を計るため、深雪の額に自分の額を当てた

深雪「だ、大丈夫だからき、気にしないで／＼」

さらに深雪の顔が紅くなったが本人が大丈夫と言ったから気にしないことにした

三枝「…鈍感な人ですね」

三枝さんが何か呟いていたが俺には聞こえなかった
そして授業の終わりを知らせる鐘の音が聞こえた

「お前ら全員整列！」

結構距離があるのに先生に声がハッキリ聞こえた

洋平「…どれだけ声が大きいんだよ」

俺たちも整列するために先生たちの所に行った

「それではこの授業は終わりにする…次もここでするらしいから移動しなくていいぞ」

先生は言い終わるとさっさと退散した

そして俺たち6人以外の生徒が一斉に倒れ込んだ

洋平「小百合、大丈夫か？」

小百合「ええ、大丈夫ですわ、ただ先生が単独で教えてからかなり魔力を消耗しましたわ」

先生「…いったい何を教えたんだ

俺はちょっと興味が沸いたが周りの生徒の疲労ぐわいを見たらやっぱり止めようと思った

洋平「リナ、疲れだけでも癒してやれ」

リナ「洋平様、さすがに回復系の魔法にそんなものではありません」

洋平「冗談だ、余り気にするな」

俺は制服のポケットから出てきたリナを撫でながら次の授業の開始を待った

選抜？（前書き）

更新遅れてすみません？

テスト勉強とかテスト勉強とかしてたら更新が遅れてしまいました

選抜？

次の授業は先生が変わっただけで前の授業と変わらなかった
ただ、先生に教えてもらってる生徒たちが倒れるのがさつきより早
かった気がする

洋平「それじゃあ、頼んだぞ」

俺もさつきと同じく、花音たちは実戦むけ、深雪たちは魔法修得を
させている

ちなみに、花音たち3人には俺がスイ、フィル、ウルを召喚し、花
音はウル、黒谷さんはフィル、相澤さんはスイの相手をして得意属
性が通用しない時の特訓をしている

属性の優劣だが

水は火に強く、土に弱い

火は風に強く、水に弱い

風は土に強く、火に弱い

土は水に強く、風に弱い

という感じだ

なのでそれぞれ得意属性が劣勢になる属性の精霊の相手をさせている
俺が教えなくても精霊にアドバイスなどをするように伝えたから、
こっちの3人はこの授業で俺は教えない

ということ、俺は深雪たちを中心に教えた

といっても教えることがなくただ見てるだけである

「片桐、お前暇そうだな、私の相手をしな」

洋平「先生…他の生徒がいるじゃ…」

俺は先生の後に生徒が山積みになされてるのを見てしまった
一体何をしたんだ、この先生は…

「片桐…本気だしなよ、じゃないとあいつらの仲間入りだ」

それって負けたらあの山に積まれるってこと！？

洋平「…拒否権は…」

「無い！」

洋平「…そうですか…」

どうしよ、今三体召喚して特訓の相手させているし、戦闘に使うと
したら一体しか使えない
使わなくても、多分大丈夫だろうけど…

洋平「遠慮無く勝ちを取りに行きます」

「お手並み拝見ね」

俺は先生との距離をとり、そのまま地面を蹴り土属性の魔法を発動
させた

「無詠唱でこの数は驚いたぞ」

この人…もしかしてバケモノ？八方向からの同時攻撃を簡単に避けた

洋平「…ならこれならどうですか？…スプラッシュ」

今度は先生の四方向に水の塊を出現させた
そして水の塊は強い衝撃波を出して破裂した

「我を守れ、ウォール」

先生が詠唱すると、4つの少し薄い岩の壁が出てきて俺の魔法を防いだ

洋平「紅蓮の炎よ、敵を焼き尽くせ、フレイムストーム」

俺は炎の竜巻を発生させて先生がいるであろう、岩の壁を呑み込ませた

風と火を合わせた魔法だから岩の壁は崩せるはずだ

洋平「…これで終わった？」

「……ア……サー」

炎の竜巻の中から水の槍が無数に飛んできた
少し反応が遅れたせいで何本か体に当たった
刺さりはしなかったが物凄い痛みがあった

当たった箇所の一つを触ったが血は出てないようだ
先生は水の槍で一瞬できた穴から脱出したみたいだ

洋平「…先生意外としぶといです」

「生徒には負けられないからね」

洋平「…ただの負けず嫌いかよ」

俺は呟き、一つ魔方阵を張った

洋平「…契約に従い我が前に姿を表せ、クロア！」

魔方阵からクロアが出てきた

洋平「あの技使うから、あの人の動きを止めてくれないか？」

クロア「任せといて」

クロアが先生に接近した

「精霊を召喚できるなんて凄いじゃない」

洋平「どうもです…」

俺は魔力を右手と両足に集中していた

クロアは先生の動きを止めようと必死になっている

クロア「よし！捕まえた！洋平様、今だよ」

俺は足に集めた魔力を使い、一瞬で先生の懐に接近して…

洋平「爆碎拳！」

右手で先生の腹を殴り、そして右手に集めた魔力を一気に先生にぶつけた

先生はそのままかなり吹っ飛び
そしてそのまま壁に激突した

洋平「ヤベ！やり過ぎた…」

「いたた」

当たった壁は少し崩れたみたいだが先生はまだ動けるようだ

洋平「先生の体は異常なまでに丈夫ですね…」

「…咄嗟に魔力を張って防御しなきゃ結構ヤバイ威力だったぞ」

洋平「で、先生はただの暇潰しに俺を選んだだけじゃ無いですよね？」

「何でそう思うんだ？」

洋平「先生が明らかに、俺を試してる様な闘い方をしてるからです」

「そうかい、まあ実際のところ近々珍しい大会が開催されるから、それに出す生徒の選抜だ」

洋平「それで俺ですか？」

「ちゃんと頑張りなよ」

洋平「俺はこれ以上目立ちたくないです」

俺は深雪たちの方へ行こうとした

洋平「あ、あれ？」

足に力が入らずそのまま倒れてしまった
忘れてたこの技まだ完璧に使いこなしてなくて、使ったら足が一時的に麻痺するんだった

洋平「クロア、肩貸し…」

周りを見たが既にクロアは居なかった
仕方がないと思い、仰向けになってそのまま回復するのを待った

リナ「回復魔法使いましょうか？」

洋平「もう少ししたら回復するから使わなくていいよ」

リナ「そうですか…」

洋平「足じゃなくて、槍が当たったところに使ってくれないか？」

リナ「はい、わかりました」

リナは回復魔法を俺にかけ始めた
俺は終わるまで先生が言っていた大会のことを考えていた

選抜？（後書き）

まず一言

内容薄かったらすみませんm（――）m

寝る前に少しづつ書いていましたが、なにせ眠気がある状態で書いたので内容がぐだぐだな気がしてしまうんです（^―^；）
テストが終わったら、前から考えていたことをやってみようと思っています

なので更新は不規則でいきます

ではまたノシ

登場人物紹介（前書き）

洋平、リナ、深雪、花音、小百合の紹介です
興味無かったら読む必要はありません

登場人物紹介

かたぎり ようへい
片桐洋平

年齢：17歳

身長：177?

得意属性：火、水、風、土

本作の主人公、四大属性を扱えて、精霊まで召喚することができる
あと、近接技も幾つか使えるが、使うと手足が麻痺して動けなくなる
使う魔法と技の大半は母親に教えてもらった
ちなみに両親は旅行に行つたきり連絡が無い

サン＝リナ

年齢：不明

身長：15?

属性：光

洋平が始業式に召喚した精霊、学校内では洋平の制服の中に入っている、学校外だと洋平の肩に乗っていることが多い
攻撃と回復魔法が使えるが戦闘時、洋平が強い為、攻撃ではなく、回復魔法を使う

ひめじ みゆき
姫路深雪

年齢：17歳

身長：135?

得意属性：水

模擬戦闘のときに洋平から魔法を教わろうとしたが失敗、試合で見事に洋平に負ける

背中に杖を背負っており、戦闘時に使用する

始業式のときに水の精霊を召喚している

あと学校内では敬語で喋っている

みやざわ かのん
宮沢花音

年齢：17歳

身長：150?

得意属性：土

森で洋平を助けて、それ以来洋平に目をつけている

何気に使える魔法のレパトリーは豊富だが、余り多用しない

あと何気に頑固

はね さいご
羽佐間小百合

年齢：17歳

身長：160?

得意属性：風

最初の授業のときに洋平を自分の下僕にしようとしたが、逆に洋平に仕えるようになった

プライドは高く、自分の事を知らなかった洋平に以下略
自分の事を普通に扱う洋平に惹かれている

登場人物紹介（後書き）

後書きまで読んでくれた人の為にこれからやろうとしていることを
チヨット紹介します

今現在私は2つの作品を書いています、2つの作品の物語がある
程度進行したら……洋平が大変な目に遭います

今はこれぐらいしか言えません

理由はまだこの作品が序盤だからです

まあ大会がどうのこうのっていうゆ伏せんを張ってしまったからそ
れを処理しないといけないとゆうのが主な理由です（ ; ; ）

これからこの物語をおもしろくなるように精一杯頑張りますので
皆さんどうぞこれからもよろしくお願いいたします

それではノシ

いい知らせと悪い知らせは紙一重

結局のところ今日あった授業は全部同じだった

ただ違うのは先生だけでやっていることは同じだ

見てて悲惨だった

先生たちの教え方が徐々にスパルタ式になって、生徒は次々倒れていった

先生たちはおそらく近々あるという大会で勝ちたいんだろう

俺にも火種が飛んで来たし…

そして大会の出場を断ろうと校長室に行けばすでに出場が決定していた…本人の意志は無視かよ…

俺は個人、団体の2つに入れられていた

本当勘弁してください

俺はリナに励ましてもらいながら家に帰ると封筒が2つ届いていた

洋平「あ、母さんからだ、こっちも母さん？なんで2つに分けた…」

俺は家に入り、封筒を開けてみた

一通目は現在地と今の状況といつ頃帰るか書かれていた

洋平「ん？写真も一緒に入っていたか」

写真は二枚あり、一枚目は母さんが何かに座っていた、二枚目は倒れたドラゴンが写っていた

洋平「ん？裏に何か書かれてる」

写真を裏返すと母さんの字で

『洋平へ、ドラゴンと遊ぼうと巢に行ったら大歓迎されたので、つい巢に居るドラゴン全滅させちゃった』もう少して帰れるからそれまで待つててね』最愛の母より』

チヨット待てドラゴンの巢って…基本的ドラゴンの巢には成竜が五、六頭いたはずだぞ

一頭でもかなり強いのに、あの人は全滅させたのかよ…
そう言えば親父のこと書かれて無かったな…

俺は二通目を開けた、手紙と写真（大量）が入っていた

洋平「えゝとなになにゝ、『最愛のお兄ちゃんへ…』って！俺に妹はいない！」

俺は思わず手紙を縦半分破ってしまった

すると突然魔方阵が出現し、女の子が出て来た

???「ふうゝ、んゝ」

出て来た女の子は周りを見渡し、そして俺をじっと見つめ

???「お兄ちゃん、会いたかったよゝ」

飛びかかって来た

俺は思わずそれを避けた

女の子は床に顔面から着地した

???「ふふふ、さすが私のお兄ちゃん、冷たい…でも冷たくされるとゾクゾクするゝ」

コイツ…マゾか！てかさっきから俺のことをお兄ちゃんって呼んで

ることは…

俺は破いた手紙をくっ付けて読んだ

『最愛のお兄ちゃんへ 初めまして、私は貴方のお母様に拾われて、貴方の妹になりました、自己紹介などは会ったときにします、それまで楽しみにして下さい 妹より P S 早く会いたいのので手紙を破ると移動形式の魔法が発動するようになってます♪』

んなバカなー！なに拾ってんだよ、家の母さんは！
てか破いたら発動するってぜってい親父の仕業だな
こんな悪知恵働くのは親父しかない

???「お兄ちゃん、どうかしたの？」

洋平「はあ、取り合えず君が俺の義妹ってのは認める、あの人ならやりかねないしな…」

俺は自分の母親に頭痛を覚えた

???「わーい、私、愛梨、よろしくねお兄ちゃん」

洋平「わかった、愛梨な、俺は…」

愛梨「知ってるよ、洋平お兄ちゃんだよね？お母様から写真を見せてもらったり、色々聞かせてもらって懂れてたの」

ダメだこの子、母さんにすでに毒されてる

母さん、俺のことを第一に考える人だしな、この事知ったら母さん、血眼になってボロ雑巾になった親父を引きずって帰ってくるだろうな

ドドドドドドド

そつそうこんな足音たてながら……って、え？

ガシャーン

リビングから玄関のドアが横切るのを目撃した

???「はあはあはあ、洋平ちゃん、愛しのお母様が帰って来たわよ」

え！母さん！早い！手紙にあつた場所からここまで普通二、三日かかる距離だぞ、母さんの本気怖！

洋平「お、お帰り母さん、ずいぶん早かったね」

俺はリビングから顔を出し、帰って来た母を見た

俺の母、片桐京子かたぎり けいこは俺が知る限りこの世で最強の人である

京子「ふふ、この人のせいで急に洋平ちゃんが心配になったの」

母さんの手には大量のお土産と生きているかどうか判らない親父が握られていた

俺の父、片桐拓磨かたぎり たくまは母さんの下僕で俺に何かする度に母さんに半殺しにされている

一応、俺より強い

愛梨「お母様、そのボロ雑巾のようになったゲスはどうしたんですか？」

親父…早くもゲス呼ばわり

京子「ふふ、このゲスはね私の許可無く、愛しの洋平ちゃんのことろに愛梨を送り込んだからこうなったのよ」

ああ、やっぱり手紙の仕掛は親父の仕業か

京子「同封した私と愛梨の写真（母多め）だけでいいのにね」

洋平「親父、生きてるか」

俺はもはや虫の息の親父をつついていた

京子「洋平ちゃん、そのゲスをつつかず、私に構って」

洋平「母さん、一応あんたの夫だぞ……リナ頼んだぞ」

リナ「任せて下さい、洋平様」

京子「あら、懐かしいわね、光の精霊なんて、洋平ちゃんが召喚したの？」

洋平「始業式の人にね」

愛梨「綺麗」

リナ「終わりました」

リナは俺の肩に乗った

京子「サンドバッグにして、引きずって来たのに傷がもう無くなっているわね」

母さん…容赦ない

親父はよくこの人と結婚したな

京子「あ、そうだ洋平ちゃん、言い忘れてたけど、愛梨と洋平ちゃん同い年だから」

洋平「…は？」

今なんて言ったこの人

愛梨と俺は同い年だと！

どこのラブコメだよ！愛はないけど…

改めて愛梨を上から下まで見てみた

髪は黒で、ツインテール

背は低くて、ボン、キュ、ボン

完全に発育のいい年下だと思ってた…

京子「愛梨は明日から洋平ちゃんの通っている学校に行かせるから、今から校長に会って来るわね」

母さんはお土産を愛梨に持たせて、親父を掴んだまま行ってしまった…

愛梨「明日からよろしくねお兄ちゃん」

愛梨は笑顔だが、俺はこれからの学校生活が不安でしやうがなかった

いい知らせと悪い知らせは紙一重（後書き）

ジャンルにある『ハーレム（予定）』をどうしようか最近悩みはじめた、どうも鳳火です

二作品同時進行させている為かネタがよくごちゃ混ぜになるんですよ（、旦那）

で結局、まっいいか、て思ってしまい、中々書き上がらない状況がはじめの頃よくありました

以上テスト勉強で疲れて思わず思い出した内容でしたノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4590x/>

オレとキミたちの魔法の時間

2011年11月27日12時46分発行